青森県偕行会「弘前忠霊塔公開」に協力

青森偕行会長　稲村孝司　陸自75

昨年7月23日発足した「弘前忠霊塔を守る会」が、弘前桜祭りに合わせて4月28日、29日の両日と、5月3日から5日の計5日間本堂、納骨堂、礼拝の間など全室を一般公開した。同会は「青森県の慰霊と観光、市民の憩いの場として多くの方に知っていただきたい」として、昨年8月のお盆期間以来の公開となった。

時間は午前9時から午後4時までの間で、毎日2名の役員が説明に当たった。偕行会員は3日間6名が担当し、小生は5月4日みどりの日を担当した。

公開に当たり、4月27日地元陸奥新報1面にタイトル「弘前忠霊塔知って　あすから本堂など一般公開」と共に忠霊塔の写真が掲載された。

THE MUTSU SHIMPO
陸奥新報
4月27日
土曜日
弘前忠霊塔　知って
あすから本堂など一般公開

公開翌日の29日には同陸奥新報にタイトル「弘前忠霊塔　手を合わせ戦没者悼む　納骨堂や礼拝の間一般公開始まる」と共に、礼拝の間で手を合わせる観光客の写真が掲載された。記事には「県内外から50人を超える観光客が足を運び、本堂で線香を上げた後、礼拝の間や納骨堂で手を合わせたり、展示室で特攻隊員の記録資料などをじっくり見たりした」。また、参拝者の「特攻隊員の遺書を通して少しでも思いを知ることができたとし、多くの戦没者を供養する忠霊塔を守り、残していってほしい」との話も紹介された。

同会発会後に、忠霊塔に対する関心が高まり新たな事実が判明した。先ず、忠霊塔の設計者だった弘前市出身の「川元良一」の詳しい経歴が判った。同氏は東京で数々の近代建築を手がけ、丸ビルや長崎造船所など、三菱関係の建築設計監督者を務めた。昭和に入ってからは、銀座アパートメント（現奥野ビル）、軍人会館（のちの九段会館、現九段会館テラス）などを生み出した。昭和15年に弘前忠霊塔の設計に着手した。戦後の昭和39年には、忠霊塔内に安置されている軍神像を制作した、弘前市出身の彫刻家・三國慶一と共に、渋谷区にある「二・二六事件記念慰霊像」を共同で建築した。また、忠霊塔の文字は菱刈隆（元陸軍大将、大日本忠霊顕彰会長）が揮毫したことも判った。

4日の観光客案内説明の様子を記す。当日は田中多巳夫会員（陸自95、83歳）と勤務した。午前8時には忠霊塔入口の鍵を開け、入口に国旗を掲揚すると共に、偕行社の幟旗2本を外柵の入口左右に立てた。来場者には、先ず、本堂前の常時開放室に掲示されている青森県戦没者銘板・2万9176柱の氏名と約1700の骨壺を説明する。あわせてお釈迦様の仏舎利及び三蔵法師の霊骨が納められている、全国でも希少な忠霊塔であることを加える。引き続き、本堂に案内し、仏舎利及び三蔵法師の霊骨が納められている金庫と弘前市出身の日本彫刻界の重鎮三國慶一が昭和18年に制作した忠霊塔の本尊・木造の軍神像を説明する。次いで、拝礼の間を通り第1展示室では、戦争の記録をパネルを使って説明する。1枚目のパネルはタイトル「ルーズベルトこそ第2次世界大戦の最高責任者である」と昭和16年当時の世界情勢を述べる。2枚目はタイトル「ABCD包囲網～追い詰められてゆく日本～」と続き、真珠湾攻撃からマレー上陸戦・マレー沖海戦と5枚のパネルで説明する。6枚目のタイトル「学徒出陣」では、日本も開戦約2年目の昭和18年10月には、戦う軍人が足りなくなり徴兵猶予されていた学生をも召集した。現在のウクライナも大学生は徴兵猶予されているが、いずれ日本と同じになるだろうと強調した。次いで「硫黄島の玉砕」と続き、最後のパネル

「負けて勝った大東亜戦争」の説明では、日本は戦闘には負けたが、戦争目的である大東亜・亜細亜の植民地解放は達成した。侵略戦争ではなく英米仏蘭の植民地解放の戦争をしたことを強調した。

引き続き、納骨堂4室を時計回りに案内し、第2展示室では、特攻隊の記録を写真、遺書、パネルで説明する。青森県の特攻隊員は「加藤幸二朗陸軍少佐・飛行第六十二戦隊」他33名である。

約30分の案内説明は、戦没者の慰霊と顕彰、大東亜戦争の意義理解に寄与出来た満足感を得た貴重な体験となった。